

明治後期の洋裁書とその周辺

—明治30年代を中心として—

宇野保子
Yasuko Uno

〔諸 言〕

「日本における洋服受容の過程」を一連のテーマとし、これと関連の深い「洋裁書」を並行して研究することにより、相互の相乗効果を図ってきた。すでにこれまでの研究により、明治20年頃までの洋裁書についてその内容を明らかにし、特徴を把握するとともに、当時の衣生活、ことに洋装を探るいくつかの情報を得てきた。

本報は、これに続く時代に発刊された洋裁書を詳細に研究し、同じ目的を達成しようとするものである。

〔研究 方法〕

前報に引き続き、『国立国会図書館所蔵明治期刊行書目録』の中から、本報の目的にかなう洋裁書を選び出した。今回は、明治20年から30年を研究対象とするのが順序であるが、図1に示すようにこの時期の発刊が、全くみられない。そこでこの空白期を経て、再び発刊された、明治30年代の9文献を研究対象とした。文献の詳細は表1に示すとおりである。

各文献ごとに取り扱っている服種や、制作、用具、材料等の内容構成を検討し、各々の文献の特徴を明らかにした後、この時期の洋裁書全般の傾向をつかんだ。

洋裁書の周辺を探る資料としては、明治ニュース事典、新聞集成明治編年史、女学雑誌等を使用した。

図1 国会図書館所蔵の明治期洋裁書の年代別発刊情况

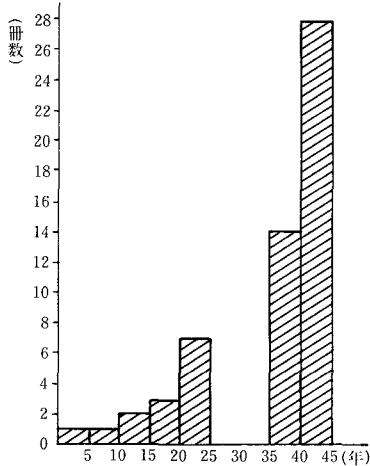


表1 研究文献一覧表

書名	著者	発行所	発行年
改良服図説	山根正次	伴鶴堂	35年
洋服裁縫教科書	本村知治	太陽堂	36年
最新簡易洋服裁断法	加藤益三郎	岡本偉業館	36年
婦人改良服裁縫指南	渡辺辰五郎	東京裁縫女学校同窓会	36年
洋服裁縫教科書	渡辺 滋	東京裁縫女学校	37年
洋服学教科書	北村勝野	大阪洋服学校	39年
洋服研修新書	熊田恒造	洋服新報者	39年
洋服裁縫自在	小山祐三郎	大学館	39年
	岡本政子		
洋服裁縫師必携書	岩村秀太郎	洋服裁縫師必携書発行所	39年

〔研究結果および考察〕

明治政府の開化以来の近代化政策は着々と進み、明治中期にはいり憲法発布、国会開設と実現し、近代国家の基礎が確立した。また経済の上でも産業革命が起り、資本主義の著しい発達をみた。

これに伴い男子洋服は、新しい政治機構や銀行、株式会社等の職場でに着用されるようになっていた。しかし、女子洋服は、鹿鳴館を舞台にした極端な欧化政策の反動から遅々として進まず、日清戦争後の国粹主義も手伝って、すっかり復古調にもどっていた。図1に示す20年代から30年代前半の洋裁書発刊の空白は、この時代をよく反映したものと考えられる。

このような女性の服装に改革の契機を与えたのが、内地雑居であった。明治32年から実施される内地雑居に先立ち、明治29年には、同準備会が内閣に設けられ、各省の準備に関する取調べ要項を調査していた。その結果、「司法省としては、特に準備すべき件なし」との解答だったと伝えられる。しかし、風俗の面では、「遊廓や、遊女の醜事に関わる淫猥卑陋なる演劇の取締り」を望む声があった。また、女子の服装改革にも目が向けられ、日本女性が、外国人に恥じないように、歩行や運動の際に裾が乱れ、前がはだけの和服の欠点を補うものとして、再び女学生の袴が見直された。

本報で扱う9文献が発刊されたのは、これに続く時代であった。

I 洋裁書の周辺

内地雑居から派生した女性の服装改革は、服装のみにとどまらず、女性の意識にも大きな変革をもたらした。20年代前半にも、一部女性の活発な活動がみられたが、30年代には、さらに一歩進んだ、積極的な動きを捕えることができる。

まずこの時期、女性のための学校が多く設立されている。明治33年には、津田梅子が、英語を中心とした国際的日本婦人の育成と女子英語教員の養成を目的として、女子英学塾を創立している。また、同年12月には、吉岡荒太、弥生夫妻の努力により、東京女医学校が開設されている。続いて34年には、有志間年来の計画であった女子大設立が実現し、小石川の日本女子大学で、家政、国文、英文の三学部の初の学生募集が始まった。女子美術教育の発展と女学校の美術教員の養成のため、美術学校が開校されたのも、この年であった。

これに加え、翌35年には、帝国女学会が創立され、その主意が次のように報じられている。

(その主意は)女子教育完成の補助を期するにありて、自宅独習者のために、毎月一回大学部議義録を発行し、修了会員にはその志望により卒業試験を行いたる上、一定の人員を限り本会貸費生として高等の学校に入学せしめ、また地方より出京する者のため修学上の監督をなし、その他学事諸般の相談に応ずる計画なり。

このような一連の女子教育機関の充実は、太田国子が、「条約改正後の日本女子」と題する演説の中で指摘しているように「女子には教育がなかったために識見がなく、東洋の昔からの女子を踏み付けたような風俗、習慣をそのまま受け継いできた。維新以来の欧米文明の鍛練になる教育が行き渡った今日でも、男子と女子の学力の程度に大きな差がある」現実に基づいたものであり、ここでの女子教育がその後の女子の社会進出に大きな役割を果たしたのである。

女子教育とともに重視されたのが、体育であった。明治32年に、ベルツ氏が医学上の立場から、女子の体育の必要性を説いて以来、体育奨励の声が高まった。日本女子大で、袴に靴をはいた女学生の運動会がみられたり、女子ベースボールがみられたりした。また、39年には、女子富士登山会が三日の行程で富士登山を計画した。

そして、30年後半には、女子の職業分野もしだいに広がっていった。明治39年、通信省では、女性17人を初めて、判任官待遇に任命した。続いて、東京の電車会社が、多数の女子職員の採用にふみきった。また、この年、吉岡弥生らが、東京で大日本実業婦人会を結成したとの記録も残されている。

この他、日露戦争を背景に活躍した各種婦人会の活動もみのがせない。愛国婦人会は、34年3月2日に、華族その他の婦人39名が発起人となって、戦死者の遺族救護にあたる目的で創立された。その後、会員は増加し、明治37年には、全国で20万人に達したといわれている。この他、赤十字社篤志看護会、報国婦人会、軍人家族授産婦人会、東洋婦人会、婦人矯風会等でも、慰問袋を送ったり、街頭で「千人針」を始める等、銃後の活動を行っていた。

次に、この時期の国内産業に目を向けてみると、軽工業から始まった資本主義の発展が重工業にも及び、それが軍需工業の面に飛躍的に現われていた。たとえば、日露戦争前は、ほとんど海外に発注・購入していた主要軍艦が、戦後は神戸や横須賀で建造されるようになっていく。こうした国内産業の進展は、大阪で行われた第5回国内勸業博覧会の盛況からもうかがい知ることができる。これを28年に京都で行われた第4回の同会と比べると、規模の上で著しく増進しているのみならず、出品人員、出品点数に至っては、約3倍に達している。

また、大阪会場では、内地の外国人が採取製造した物品も出陳され、さらに特設の参考館では、諸外国からの新製品の収集もなされていたという。加奈陀館の冷蔵庫が人気をよんだとの場内雑感も残されている。

この時期、関税自主権確立の見通しがついたこともあり、輸入品が国民生活の各部門に及んでいった。上等「舶来」品という言葉が一流輸入商品の呼び方となり、フランスのコティ化粧品を真似て、「家庭」石鹸や白粉が販売されるなどした。こうした商品はその販売場所も、百貨店といわれる設備もサービスも華やかな場所で扱われた。

明治37年、三井呉服店は、三越呉服店と社名変更し、「店舗の面目を一新し、商品飾り付け万端最新の改良を加え、来客方にいっそうの美感を生じ、愉快地買物をなさるよう充分設備する事。商品の種類を増加し、米国のデパートメント・ストアの一部を実現する事。」等の新方針を打ち出した。そして40年には、デパート方式で店内を一新し、呉服店に似合わぬ、靴、旅行用具、履物、帽子、洋傘その他の小間物類を陳列し、数年来の理想を実現した。

このような国内産業とその流通をさらに発展させたのが、鉄道の国有化であった。明治39年3月31日10年以内に、主要鉄道のすべてを国有化するという趣旨の「鉄道国有法」が公布された。

さて、次に人々の衣生活に大きな影響を及ぼした輸入品として、ミシンについてふれてみたい。明治34年、シンガーミシンが初めて輸入されたが、翌35年には、東京に支店が造られた。続いて39年には、シンガー裁縫女学院が開校された。この学院は、家庭に於けるミシンの利用を教えるのが目的であり、生徒は中流以上の夫人や令嬢であったという。教材も、3カ月で、小児の簡単服、ホワイト襯衣、6カ月で小中学校服、1年で背広と、家庭の実用に適したものが選ばれていた。やがて、シンガーミシンは、

同学院卒業生を出張させ、ミシンの使用法、和洋ミシン裁縫の一部を教授させたり、月賦販売を開始させるなど、積極的な販売にのりだした。こうした動きが、洋服を家庭裁縫という形で、一般婦人の家庭生活の中に浸透させていったものと考えられる。

II 洋裁書の内容分析

1. 洋服の種類

表 2 は、各洋裁書を掲載している洋服の種類とその点数によってまとめたものである。文献により掲載方法は、計測箇所、デザイン画だけという簡単なものから、製作過程を詳細に説明したものまで様々であるが、ここでは、すべて同様にひとつとして数えた。

まず、紳士服については、表 2 に示すとおり、ほとんどの文献に掲載されており、その種類も背広、礼服、外套類と多種にわたっている。中

でも背広は、シングル、ダブル、ボタンの数の違い等による複数のデザインが扱われている。またその他の項目は、ズボン、上着等、背広の一部とみられる物も含まれているので、実質の背広の数は数字より多くなると考えられる。

礼服類としては、フロックコート、燕尾服、タキシード、モーニングコート等がみられる。文献によっては、燕尾服をデンナーコート、イヴニングコート、エンピコート、ナイトフルドレスコートと記載した物、タキシードをサックコートとしているもの等もみられた。このような様々な名称は、欧米各国の数十年にわたる洋服を一度に取り入れたためにおこった混乱とも、原語を日本語訳にする際の表記のし方の誤謬とも考えられる。

外套類は、オーバーコートが多く、インパネス、トンビ、ケープ等もみられた。

その他の項目には、先にふれた背広の一部の他、ハンチング二点が含まれている。

婦人服については、巻末に付属的な扱いで、簡単に記された物が多く、さし絵や寸法表だけの記述や、紳士服の応用でジャケットが製作できるという文面だけの説明もみられた。名称も女服上衣、婦人服、レデードレス、メト一服等、漠然としている。その中で、文献 9 は、女服裁縫に関する総論の章を設けスコイツ、ジャケット、ロングコート、婦人遊船服、シャツウエスト等の製作について、紳士服と同様の扱いをしている。表 2 の婦人服中 () 内の数字で表わされているのは、吾妻コートである。文献 2 によれば、「吾妻コートはもと西洋服にならずして全く和服の種類なり。故に以前は此服を和服の仕立屋と稱するもの之を仕立てたり。然れども今は一般洋服裁縫師のなすところなれば今茲に之を説明すべし」とあり、製作について記述されている。婦人服の記載が総じて少ない中で、この吾妻コートは例外で、文献 3、6、8 でも、同様にとりあげられている。

表 2 各文献に掲載された洋服の種類

番号	書名	紳士服				婦人服	子供服	改良服	計
		背広	礼服類	外套類	その他				
1	改良服図説	—	—	—	—	—	—	5	5
2	洋服裁縫教科書	3	9	1	1	2+(1)	2	0	18+(1)
3	新簡易洋服裁縫法	1	3	0	0	1+(1)	0	0	5+(1)
4	婦人改良服裁縫指南	—	—	—	—	—	—	3	3
5	洋服裁縫教科書	0	0	0	4	0	0	0	4
6	洋服学教科書	0	5	2	7	4+(1)	3	0	21+(1)
7	洋服研修新書	2	6	4	20	1	1	0	34
8	洋服裁縫自在	1	3	3	3	6+(1)	9	1	26+(1)
9	洋服裁縫師必携書	6	7	8	4	8	0	0	33
	計	13	33	18	39	22+(4)	15	9	149+(4)

子供服についても、婦人服と同様簡単な取り扱いとなっている。具体的には、ワンピース型の女児服やジョンベルと呼ばれる上着と半ズボンの男児服等が紹介されている。

改良服は、これだけを掲載した文献1, 4の他、文献8で「純然たる洋服にあらずといへども、さりとて和服にもあらず、和洋を折衷したる一種の服にして改良服と名づくるものなり」として、紹介している。

2. 内容構成

次に、前節で取りあげた洋服が、どのような内容で説明されているか、文献全体の内容構成に着目していく。表3は、各文献における製作、用具、材料等の内容の記載の有無を調べたものである。表中○印は記載が有ることを、◎印は詳細な説明がなされていることを示している。

全体に内容は、製作に関する事が中心であり、特に製図に重点がおかれている。文献3に、「洋服地を裁断するには、——(略)——恰日本の足袋地をたつと同様に紙儀型が要るのであります。裁断法と云えば、取不直、その紙儀型の作成法であります」とあるように、「裁断法」は現在、洋裁で使われている布の断ち方をさすものではなく、その前提となる型紙の製図法をさしていたのである。また、この記述は、平面製図の型紙を用いる洋裁の手法を解いたものであり、文献5, 7, 9にも共通している。この他の製作に関する内容としては、文献7に採寸の詳細な説明がある。なお、縫製については、記載されている文献も少なく、取り扱いも簡単である。

「用具」については、文献2と8にミシン裁縫の予備知識となるような事柄が簡単に述べられ、文献6に、ミシンの分解や運転等、より実践的な内容が盛り込まれている。ミシン以外の用具は、ほとんどの文献で何らかの形で取りあげているが、尺度、曲尺、アイロン、剪刀等、20年代にみられた物とほとんど変わらない。ただ文献2で著者の加藤氏が考案した「形付」と称するルレットのような用具が紹介されているのが、目新しい。

「体形」に関しては、文献6の「人体ノ構造」の章で、洋服の製作に着手するにあたっては、まず人体の構造をよく知ることが大切であることが、述べられている。また文献7では、具体的に、前屈、反り身の人等の体形に応じた型紙の補正の仕方が詳細に記されている。

「材料」の記載は非常に少ないが文献2, 8から、当時の洋服生地を知ることができる。それによれば、表地として羅紗、スコッチ、ヘル、セル、メルトン等が、裏地として縹子、スレーキ、キャラコ等が使われていたことがわかる。

「その他」の内容では、基礎縫いと洋裁用語の英和対訳等が2, 3の文献にみられる。また文献5に、製

表3 各文献の内容構成

文献番号	書名	製作						用具		体形	材料	基礎縫	和洋名称	その他
		着写用図	採寸	製図	裁断	仮裁補正	本縫	ミシンの他	その他					
2	洋服裁縫教科書	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○		
3	最新簡易洋服裁断法			◎					○				○	
5	洋服裁縫教科書			◎					○					製図の例題
6	洋服学教科書						○	◎						完成後の修正、服装の規定
7	洋服研修新書	○	◎	◎		○			○					
8	洋服裁縫自在		○	○			○	○	○		○	○	○	標準寸法
9	洋服裁縫師必携書			◎					○				○	服飾史、心地

図の実習のための例題が、文献8には、年齢別の標準寸法が記されている。この他、文献6には「完成後の修正」や、洋服のTPOについて説明した「服装の規定」の章もみられる。これに加え、文献9では、心地のつくり方、各時代の服装の歴史や、様々な洋服の由来等についても言及している。

3. 分類とまとめ

これまで、各文献を、掲載している洋服の種類、内容構成等の上から捕え、相互の比較を行なってきた。次に、これを基にさらに、文献の性格、対象とする読者等を考察して、総合的に分類を試みたのが表4である。以下これに従って、説明を進めていく。

I類の洋裁書は、共に改良服を扱っている。文献1は、和服の弊害、日本人にとっての洋服の欠点等を説明し、これに変わる新しい衣服として自らが考案した改良服を紹介し、その製作方法を著わしたものである。製作法は、鯨尺を用いた寸法裁ちで、和裁の心得のある者には容易に製作できるよう配慮された、一般向の実用書と考えられる。

また、和服、洋服の弊害を論じて、衣服改良の必要性を解いた点では、啓蒙書的な性格も認められる。文献4も著者が考案した婦人改良服上下3体の製作方法を書いた小冊子である。女学生のために書かれた教科書のようにも思われるが、一般の実用書にもなりうるものである。

II類の洋裁書は、取り扱っている服種、内容共に多岐にわたり、洋服裁縫について広く浅く書かれた一般向の実用書である。文献2の諸言に「将来日本国民に最も適当したる改良服を作らんことを予期するものなり、さてその準備としては、これまで余り世間に広く知られざる洋服の裁縫について研究することまづ第一に必要の事なるべし」とあるように、改良服を作るために、洋服を知るといふ目的で書かれたものであった。鯨尺を使用しているのもそのためであろう。また文献2、3共に、当時流行していた吾妻コートが記載されているのも、一般向の実用書の性格にかなったものといえる。

III類の洋裁書は、職業人を対象と

表4 明治30年代の洋裁書のまとめ

分類	番号	文献名	服種	裁断のシステム		対象	性格
I類	①	改良服図説	紳士改良服 婦人改良服 子供改良服	鯨尺	寸法断ち	一般	実用書 (啓蒙書)
	④	婦人改良服 裁縫指南	婦人改良服			一般 女学生	実用書 教科書
II類	②	洋服裁縫教科書	紳士服 吾妻コート	鯨尺 鯨尺	フリーハンド 寸法断ち	一般	実用書
	⑧	洋服裁縫自在	紳士服 子供服 婦人服 吾妻コート	インチ インチ 鯨尺 鯨尺	フリーハンド (洋服地) (和服地)寸法断ち 寸法断ち		
II-III類	③	最新簡易 洋服裁断法	紳士服 吾妻コート	インチ 鯨尺	フリーハンド 寸法断ち	一般 職業人	実用書
III類	⑦	洋服研修新書	紳士服 婦人服 子供服	インチ	フリーハンド	職業人	実用書
	⑨	洋服裁縫師 必携書	紳士服 婦人服				
IV類	⑤	洋服裁縫教科書	紳士服	インチ	フリーハンド	東京裁縫 女学校学生	教科書
	⑥	洋服学教科書	紳士服 子供服 婦人服	鯨尺	(フリーハンド)	大阪洋服 学校学生	

した本格的なレベルの高い技術書である。文献7は、紳士服の製図法と仮縫いに関する記述が中心だが、婦人服や子供服も、紳士服の定則さえわかっているならば、その応用で、たやすくできるものであるとして、家庭での実践を進めている。文献9も、紳士服と婦人服の製図の割り出しが中心だが、他の洋裁書にはみられない心地の作り方や、服飾史、各洋服の由来などについても触れている。また、総論にみられる著者の裁縫師への要望は大きく、現代のファッションにつながる思想も読みとることができる。

IV類の2文献は、特定の学校の教科書として使用された物であるが、文献5は、教材を紳士服のズボンとベストにしぼり、詳細な説明がなされているため、独習書にもなりうる。

さて、文献3は、文献2と類似点を多くもつ一般向の実用書のようなのだが、実施経験をもつ著者がフランス流の製図法を展開している点では、職業人向とも考えられ、II類とIII類の中間的な存在といえる。

次に、以上のような明治30年代の洋裁書を20年代の洋裁書と比較することにより、その特色を明らかにしていく。

まず、掲載されている服種については、30年代の特色として、紳士服の種類が多くなった事、婦人物では改良服、吾妻コートがみられるようになった事が、あげられる。これに関しては、国家の近代化、国内産業と流通の発達等により、男子洋服が、新しい職場でより多く受容されるようになっていたため、改良服については、内地雑居に伴い、日本の女子服が再考された結果と捕えることができる。

裁断のシステムは、20年代までにみられた鯨尺による寸法裁ちは、しだいに見られなくなり、インチによるフリーハンドに統一されてきていることがわかる。

また、全体の内容も以前のような単なる洋服の啓蒙書、教養書に終わる内容の物はなく、皆実用書として使用できる洋裁書である。とりわけIII類の文献などは、より良い洋服を仕立てるための裁縫師の手引き書として評価できるが、文献9では、「日本の裁縫師は縫い方は良いが、裁ち方の原理がわかっていないので全体の容姿が悪い」「裁縫師は美の思想の高さに伴い、同じ物品にても気品高き仕立てとなる」「裁縫師は変遷する流行を知るために3、4年間海外で仕事をするのがよい」といった適切な指摘をしている。

このような洋裁書は、自らが洋服仕立てを手がけ、その上で必要性を感じて留学し、帰国の後、その経験を生かして仕事を続けている著者から生まれたもので、前代にみられた単なる翻訳本とはこの点で大きく異なる。

〔要 約〕

明治30年代は、内地雑居に伴う風俗上の改革に目が向けられ、従来の日本女性の服装改革が叫ばれた。この頃、女性のための学校の設立が相次ぎ、30年代も後半にはいると、女性の職場への進出もしだいに広がっていった。

一方、軽工業から始まった産業革命は重工業にも及び、著しい国内産業の発達をみた。また、関税自主権確立の見通しがついたことにより、輸入品もしだいに、国民生活に浸透していった。

そのひとつであるシンガーミシンは、東京に支店を造り、その後、裁縫女学院も併設した。ここでは、家庭婦人のためのミシン裁縫の指導が行われたが、これが、洋服を裁縫という形で一般家庭に受容させる契機を作ったと考えられる。

このような、新しい社会の動きの中で発刊された30年代の洋裁書は、学生、一般人、職業人のそれぞれの人々の実用になかった充実した内容を持っていた。取り扱っている服種は、当時新しい職場で盛んに受容されていた背広を中心とした紳士服であった。この他、30年代を中心に大流行していた吾妻コートや、改良服を記載した物もみられた。

また、職業人対象の洋裁書では、紳士服中心の記述がなされてはいるものの、これを応用展開して、婦人服や小児服を作ることができるような説明もなされており、一応の洋裁の基礎が押さえられた洋裁書が、すでにこの時期に発刊されていることが知られる。

この時期のレベルの高い洋裁書について考える時、20年から30年にかけての洋裁書発刊の空白は、決して、洋装化の上での後退ではなく、海面下での熟成の時期であったと思われるのである。

(付記) 本研究の概要は、日本家政学会第38回研究発表会(1986年5月4日)において口頭発表した。

〔参 考 文 献 等〕

- 1) 宇野保子 明治前期の洋裁書とその周辺 中国短期大学紀要 15 (1984)
- 2) 宇野保子 日本における洋服受容の過程 明治中期 中国短期大学紀要 16 (1985)
- 3) 「日本」 明治31年11月17日 『明治ニュース事典』
- 4) 「時事新報」 明治32年3月28日 『明治ニュース事典』
- 5) 『女学雑誌』 478 明治31年12月25日
- 6) 『女学雑誌』 482 明治32年2月25日
- 7) 「報知新聞」 明治33年7月21日 尚、同校の創立は明治33年9月14日である。
- 8) 「国民新聞」 明治33年2月17日 『明治ニュース事典』
- 9) 「時事新報」 明治33年12月23日 『明治ニュース事典』
- 10) 「時事新報」 明治35年3月28日 『明治ニュース事典』
- 11) 「国民新聞」 明治35年4月10日 『明治ニュース事典』
- 12) 「時事新報」 明治31年7月5日 『明治ニュース事典』
- 13) 『女学雑誌』 495 明治32年9月10日
- 14) 「読売新聞」 明治35年3月31日 『新聞集成明治編年史』
- 15) 「日本」 明治39年6月28日 『明治ニュース事典』
- 16) 「東京朝日新聞」 明治39年7月16日 『明治ニュース事典』
- 17) 「日本」 明治39年7月23日 『明治ニュース事典』
- 18) 「時事新報」 明治34年3月1日 『明治ニュース事典』
- 19) 「東京朝日新聞」 明治37年9月29日 『明治ニュース事典』
- 20) 「大阪毎日新聞」 明治36年3月1日 『明治ニュース事典』
- 21) 第4回勸業博覧会(明治28年)と第5回勸業博覧会(明治36年)の比較

	敷地坪数	各館坪数	開場日数	来観人員	出品点数	出品人員
第4回勸業博覧会	50,000	10,554	122	1,136,695	169,098	73,781
第5回勸業博覧会	100,000	16,000	153	—	526,309	207,344

20) の記述をもとに著者が作成したもの

- 22) 「大阪毎日新聞」 明治36年4月23日 『明治ニュース事典』
- 23) 「中外商業新報」 明治37年12月14日 『明治ニュース事典』
- 24) 「国民新聞」 明治40年4月3日 『明治ニュース事典』
- 25) 「官報」 明治39年3月31日 『明治ニュース事典』
- 26) 「国民新聞」 明治35年3月15日 『新聞集成明治編年史』
- 27) 「国民新聞」 明治39年10月22日 『明治ニュース事典』
- 28) 「時事新報」 明治40年4月5日 『明治ニュース事典』